

## 週日の説教

金 大烈 神父 2010年12月21日(火)

《赦しの秘跡に与る3つの基準 - 神様・自分・あらゆる関わりに対しての振り返り - 》

司祭になる前に、ある方から聞いた、温かい話を紹介させていただきます。

ある小教区に地区長をしている奥さんがいました。その奥さんは、地区のために一生懸命に頑張っていました。しかし、彼女の心を痛めるある女性がいました。その奥さんは、「地区長としてよいことをしようとすれば、つまずかせようとするものが現れるのは当然なことだろう。」と思い、その女性を赦そうと頑張りました。しかし、頭の中にしっかり作られてしまった憎しみは、なかなか無くなりません。だから平安な気持ちを保てなくて、祈ろうとしても、自分の心を痛めたその女性の顔ばかりが浮かんで来てしまいます。その奥さんは、どうしたらよいかと結構悩みました。ある日、彼女は聖堂に入って、<sup>せいひつ</sup>聖櫃の前で黙想を始めました。そして、いろいろなことを考えながら祈っていると、声が聞こえたような気がしました。その声は、「私が代わりに謝ってもいいか？」と言いました。その奥さんは、神様が「あなたが彼女を赦せないのならば、彼女の代わりに私が謝ってもいいか？」と言っているのだと思いました。

罪というのは、私たちが加害者となって、いろいろな悪いことをすることです。しかし、人を赦せないことも神様の心を痛める大きい罪の一つなのかもしれません。なぜならば、赦せなければ、イエス様が見せようとした全てのことができなくなってしまうからです。だから、いつも赦しの秘跡を求めなければならぬのでしょ

う。私たちは、いろいろな否定的な感情に囲まれて生きています。嫌いな相手がいるとき、いくら優しい目で相手を見ようとしても、相手の顔が見えたら嫌な気持ちになってしまうのが全ての人間の弱さでしょう。しかし、「弱さだから仕方がない」と諦める必要はありません。「私がこのことを赦さなければ、神様の心を痛めるのかもしれない。」「逆にイエス様が私に謝っているかもしれない。」そのような気持ちになれば、相手に対する視線も変わると思います。

私たちには、自分が罪を犯したかどうかすぐに分かります。「ああ悪かった。してはいけないことをしてしまった。」とすぐに気づきます。教会に来ない人でも分かります。少なくとも、小学校、中学校で、倫理社会や道徳を勉強した人ならば、みんな分かります。しかし、大切なのはそういうことではなくて、心を痛めなければならないのにも関わらず、全く無感心で過ぎてしまっていることです。それらに耳を傾けよう、目を向けようとする態度が必要なのではないのでしょうか。

先ほどご紹介した、あの奥さんの体験は、私たちに二つのことについて気づかせてくれます。一つは、私が赦せない時に、誰よりも心を痛めているのは神様かもしれない、ということです。それは、神様と私たちのつながりが切れてしまうからです。二つ目は、あの奥さんの体験は、祈ろうとする心を持って、時間をとり、実際にご聖体の前にひざまずいて祈ったから得られた恵みだということです。

そういうことを頭に置いて、私たちも振り返ってみましょう。

私は今日、ミサの前に赦しの秘跡を受けませんでした。それは、赦しの部屋に入る前に心の準備が必要であることを皆様に知らせたかったからです。赦しの部屋に入る前には、まず自分の罪が何であるか、気づかなければなりません。そのためには、三つの基本的な基準があります。

一つ目は、神様に対する心の基準です。私はどのくらい神様に委ねているのか、どのくらい神様に忠実に従おうとして来たのか、神様に関する全てのことを振り返ってみなければなりません。それが、赦しの秘跡を受ける前に一番必要なことです。どんなことで神様の心を痛めたか、祈りをきちんとして来たか、神様を意識して過ごして来たか、それらを考えずに赦しの部屋に入ったのでは、ただ部屋に入るだけで、意味のない赦しの秘跡になってしまいます。

二つ目は、自分に対する基準です。自分をどのように扱ってきたか、神様にかなう自分にしようと頑張ってきたか、それを振り返ってみなければなりません。神様は、私たちを尊い存在として認めてくださいました。しかし、私は本当に自分のことを尊い存在として大事にし、いつも前向きに正しく生きてきたのか、自分の心を憎み、劣等感に囲まれて、自分が嫌になっていなかったか、そういうことを振り返ってみなければなりません。

三つ目は、自分と関わっている全ての存在に対する基準です。まず、身近な妻、夫、子ども、親、それらの関係に対して本当になすべきことをして来たか、家族の絆に感謝しながら、利己的ではない、本当に正しい愛を行ってきたか、振り返ってみなければなりません。そして次に、隣人、友達、その他のいろいろな関わりにも、どのような態度を見せてきたのか振り返らなければなりません。それらを考えれば、「私には罪がありません。」と言える人はこの世にはいないでしょう。

この三つの基準を意識した時、心の中に出来るのが『<sup>つうかい</sup>痛悔』です。『痛悔』というのは、「これは間違えた。これは反省するべきだ。」くらいのことでありません。「痛みが感じられて、この罪を持ったまま生きることはできない。」くらいの気持ちになることです。「こんな状態では、これから先、一歩も進めない。」という心の働きです。赦しの秘跡を受ける時には、先ず、この『痛悔』の心まで行かなければなりません。

さあ、今、三つの基準について申しあげましたね。

一つ目は神様に対して、二つ目は自分自身に対して、三つ目はあらゆる関わりに対しての振り返りです。

そして最後にもう一つお願いしたいことがあります。それは、赦しの部屋に入ったら、人間としての金神父を意識しないでほしい、ということです。人間として意識するかどうかより、「いない」と思ってください。赦しの部屋に入ったら、「隠したい」気持ちではなくて、「隠せない」という気持ちにならなくてはなりません。神様に申し上げるような気持ちで、入ってください。

何回も申し上げて来ましたが、司祭は、赦しの部屋で話されたことを絶対に覚えられません。もし覚えられたら、自分が変わってしまいます。ふつうの生活が出来なくなってしまいます。聞いて忘れ

ること、特に赦しの部屋の中の話は忘れること、それが司祭職としていただいた一つの恵みです。それなのに、赦しの部屋の中で、なぜ司祭を意識するのでしょうか。そのような意識を持つ方は、自分の気に入らない司祭のいる小教区ならば、わざわざ遠くまで、桐生や東京まで行ったりして、赦しの秘跡を受けようとします。それは、赦しの秘跡の<sup>まこと</sup>真の意味さえ分からない人のすることです。

皆様、もう一回お願いします。赦しの部屋では、私だけでなく他の司祭であっても、人間として意識しないでください。意識してしまうと、口が閉じてしまいます。心も閉じてしまいます。そのような気持ちで赦しの秘跡に与りましょう。

ありがとうございました。